

限界と課題を見つけた2年間

第11期 西本 真志

「自分は小野ゼミに入会して目標を達成できたのであろうか？」この問題意識に回答する為、私が小野ゼミに入る前、ES に書いた目標を参照してみた。すると小野ゼミに入会前の私は、「自分を成長させたい」と主張し、具体的には、人と出会うこと、知識を得ること、そして結果を残すことを目標としていた。

それではまず、1 点目の人と出会うことはできたのだろうか。この点に関しては、出会えたと言えるであろう。小野晃典先生と出会い、マーケティングの知識はもちろん、正しい日本語の使い方や、論理的な考え方、そして様々な社会人としての常識を教えていただいた。優秀な同期と出会い、論文執筆やプライベートにおいて濃い時間を共有し、同期の素晴らしいところ、そして自分の足りない点を見つけることができた。そして何より、同期とは一生大切にしていきたいと思える関係を築くことができた。また、尊敬する先輩方や、多くの後輩にも恵まれた。

次に、2 点目の知識を得ることはできたのだろうか。この点に関しては、得たと言いうるであろう。基礎文献、ケース、ディベート、三田論、卒論。これらに取り組む中で、小野ゼミに入らなかった場合の自分に比して、また2年生の自分に比して、多くの知識を得ることができたことは間違いない。また学術的な知識だけでなく各活動を通じて文献を美しくし仕上げる書式やデザインへの「意識」も養われたと感じる。しかし、実際の技術が身に付いたかと言われれば、この点に関してはまだ課題が残っていると感じる。

最後に3点目の、結果を残すことができたのだろうか。この点に関しては、自分の思うような結果を残したとは言い難い。私は小野ゼミに入ってから、大きく3つの挑戦を行った。それらは KUBIC、関マケ、卒論であった。しかし、これらの3つとも、自分は満足のいく結果を残すことができなかった。確かに、関マケにおいて、自分たちは論文賞という結果を残すことができたものの、目標であった総合優勝という結果には及ばなかった。また KUBIC は予選の審査で敗退し、卒論も12月19日の締め切りに間に合うことができなかった。つまり、結果という観点からは、この目標を達成することはできなかったと考えられる。

以上3点を総合すると、自分の小野ゼミでの2年間は、100点満点であったとは言い難い。どちらかと言えば、やり残したことが多くある。論理的思考力、資料作成能力、日本語力…しかし、たとえ技術の習得や、結果を残すことが不十分だったとしても、この2年間で、様々な素晴らしい人々と出会うことができた。また、思うような結果を残すことができなかったことも、自分に残された課題を知り、これからの成長の方向性を見つける良い機会となった。ゆえに、小野ゼミでの2年間は、今後の自身の成長に欠かせない2年間であったと言いうるであろう。末筆とはなってしまったが、自分にこのような幅広い学習の機会を与えてくださった小野先生、また同期や先輩、後輩に感謝したい。本当にありがとうございました。